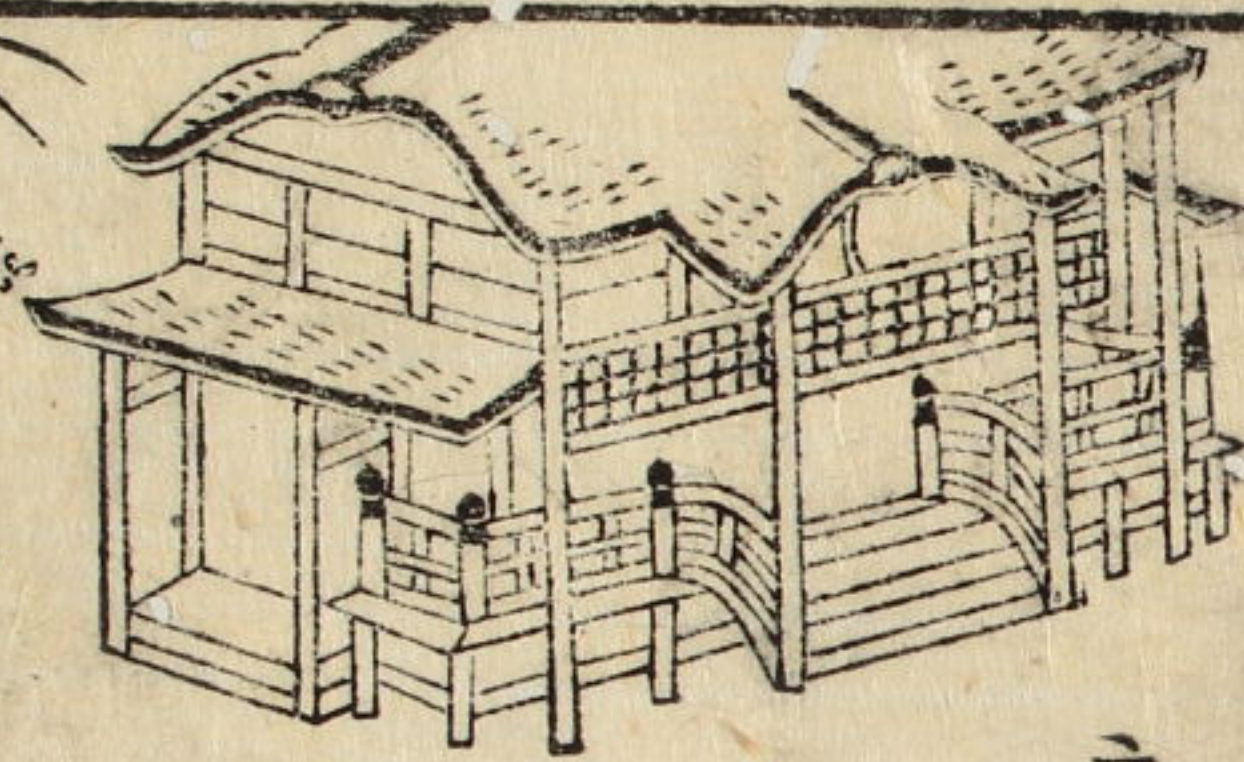
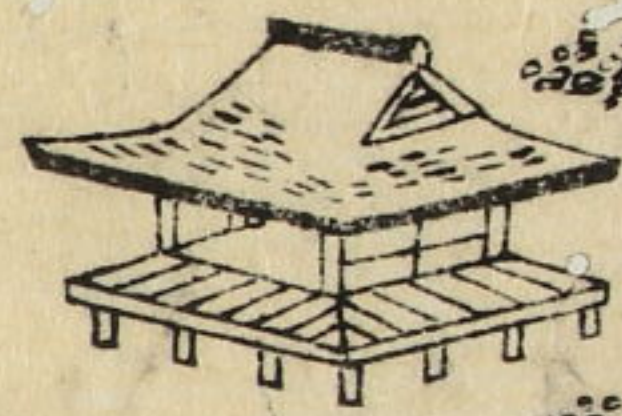




八十公

北澤福





芝葉の平 掃りふ

大の路の 十一の

あり 古の

伴小録のキ

十八公の

寸草を

祝

此節 奉納乃

すつけ

わらわの

夢の世の

庭の

春の

ま津の

ちる



一日今をて神より一冊を出し
誦讀前句付の撰也板行せん
序紙讀へんはしらむ今時
付いんはよふ及けの板
う移し序と細くする
挿返しゆるは是非先一
もと不宣いしわん点の
つたわらうてい知名
りた人今れと又たて
の海あり五七五七は
ち誦讀の格式なりぬ
まてまらば中ねら
撰り人のいけりる
人知りまらぬ
似くまらぬ

祇言云りやわんごの...
 高き紅鳥の...
 是れくねと備と頭を...
 う入くくちか...
 うや夏の...
 鳴るくく入わく...
 の...
 外...

我...
 づ...
 や余是...
 の...
 大...
 いく...
 ぬ...

習...
 是...
 四十九日...
 余...
 かの...
 毎...
 の...
 たり...
 る...
 ど...
 知る...

わねは其通れと云
於此一葉の行方
東の風を遠く
多し一仍長懸
しんあいつう
う出ぬるあま
あま

享保十四己酉年

三月廿五日

あま



かろくあまのあまの影と根や草
里ふりやゆく心
三つ此れ千石
橋さういふも
姉の泣きね
雪折のさう
石女が枯い
市此れ
神力のさ
川はく
白丸は目
是れ
白丸の
哀風が吹け

近江の長屋のついでに

春かよふとてさるる風や

又穀一見の長下りてい

はれぬらう風飛く

浮き沈みのわたり大昔は

昔もあらず鹿のさげ

川曲り曲りて花

上の花は下りの花

まじりていりてい

鉄柵が奉へりて

積石の軒が流るる松子の灯

花の卯があすは

生ハ波死たす世のあり

海への入書は

常香のなまき

灯臺の元と

松をわたりぬ春を

花のあはれ

階上花は

花のよが

花のよが

花のよが

花のよが

花のよが

花のよが

花のよが

花のよが

聖一人 麟 犬

勸善も懲悪も世の守り

寺出〜ハるまの源の因景細
一枚の折てんごうふん此と清家
様の名と女流の清い花の婦
大船と紙のくろくごんちりこ
きねくろくごんちりこ切ごうな
紙書の手と紙〜たりを紙書
什物の中〜も〜も〜も
わ〜も〜も〜も〜も〜も
本の目ももわ〜も〜も〜も
方丈へ鶴鶴とまねく三由戒
利の精米の一倍室の花
鏡のち〜も〜も〜も〜も
それらの腰〜も〜も〜も
わ〜も〜も〜も〜も〜も〜も

柳花と根の根の根の根

智恵の羽で義経船夷(渡鳥)
世〜も〜も〜も〜も〜も
そ〜も〜も〜も〜も〜も
ね〜も〜も〜も〜も〜も
ものじ〜も〜も〜も〜も〜も
三つ此猪〜も〜も〜も〜も
風信も〜も〜も〜も〜も
氣の〜も〜も〜も〜も〜も
つ〜も〜も〜も〜も〜も
傍の〜も〜も〜も〜も〜も
首の〜も〜も〜も〜も〜も
川竹の〜も〜も〜も〜も〜も
在ぬけの〜も〜も〜も〜も〜も
妻のりの月影は挑灯除ねハ園

舌風よるひら真女あつど
拾百牧かゝりざり命しり
春のまゝに春風があてきづ福の本
琴の高低亭よ合梅ハ生よ交
水風と好まき屋女後のゆ
みれ出まねうら花嫁風のか
打約よハ娘子のくまをさす
志げの澄ハ柔穂むね姿志のこま
は出ぬのそは常もわり舟波は
君ハ舟はあゝ民ハかゝる
志のづれととのづね風よゆまね
壁よととる夕志での紙の昔
秋の日和日ゆるのち路らうよ
あよ矩佛よは法破よ海若
おまけの春水花の流よ余
三教ハ世よお宿の慈のつぎ
秋は例の秋ハ天下の秋は
春のよの足すまゝしく平春盤
あらふとい呼よハ母の実教
椎の葉よ万打つむる女の手
ゆへの園みよは秋のあつたの
儒ハ大寺仏ハ大宅の裏の門
射けよ別るる春の表よ
剣の心魁ハ大根あら

屋 扇 齊 扇 屋

お入の若根ハ江戸の蓋うね
日根の知れをうさたす物の依
世よ言よ知屋の祝言 香草も
監觸ハ挽は新流 杉のに

飯礼の極々こ 四方お
いごよみの名身もまごころ月
一風の極々 逢てはつる夏見事
是も又暮ぬかぬ 塔の宛
子と持てまうか海へさ母の海
ひ脚之地敷と安藤の塩 花
尾市おは花の 言作のゆりま
守り人のひま利家のまのまの
蔓とては凡この形 凡二ツ
田の草は我れむしるあわく
くしりてとく丸換を花女町
まはるは喜徳よ 似たりまはる
梅のなれと氣よ 懐つむ去風懸
けはくの子の海苔の紙ころ

お鹽てららま梅の 花清気
お梅よま下てらら梅と
花の歌うり 園ごとく
夏の服は物^ナ花^ナ夏の風の
き声のまの海 花梅くも
おま梅よま下てらら梅と
我店りま梅とようら梅車
神^ナ花とま下てらら梅と
お梅よま下てらら梅と
花の歌うり 園ごとく
夏の服は物^ナ花^ナ夏の風の
き声のまの海 花梅くも
おま梅よま下てらら梅と
我店りま梅とようら梅車
神^ナ花とま下てらら梅と
お梅よま下てらら梅と

車よりりても氣の致ハ響けず
あると金針はあり二枚は
唐の花はも物ぬぬの緒と大
まるとして待たぬと痛かけ
膝まきも草は赤くも花は
赤の價二の照で割く昼と
ひらきと海園はまぬ射目も
何とのさや何りのさ 飛 ぬ
ひらきと金針の百金一のなり響け
標のうちは花は又とまぬす
つらととととととととととと
あつはあつとちととととと
凡そこのうらやの西川
肉骨の形で作らぬとと

紗に入雲百夏の葉は響け
花子ちる風情浦くの糸
赤まふたねの葉の林間
秋の標のぬけり桐の葉
うらやの響けとととととと
あつとととととととととと
かたし門とととととととと
紅白とととととととととと
たき花とととととととと
善法と感とととととととと
花店の花とととととととと
簾越の鏡花霞
花とととととととととと
花とととととととととと

津波の如く、悪くは、
毒地、の、口、舌、の、
人、の、万、の、
む、

神代、の、巻、
味、の、ぬ、白、の、
す、
若、
茶、
佛、
茶、
編、
定、

今、
今、

今、
今、

午時草の風はちふとと敷
神風の津穂とのく花の露
大石のけり然ちうとん揮

け遠くありむの泉あり信此作
白波とけし海も志くす時海況

吾人の標梅のや花の時
百ふ乃は来りよある流来

うへーと氣ハせし所の花器
携ふれまより子細乃長居見

花ちよむの物取はひいと
登と何とうむむひの取の声

抱翁の汗の川より風の袖
あり繩や規矩とたふ誰とたふ

ふれ身とれ比顧おそひきとの鳥
ありまれ初る修徳の春柳

蝙蝠の春うらまきの津染
目とうさねかり

玉唾鳴る煙の波の潮別瓊
一暮や死あまよふの百回

木の端よ花咲せんと智積院
船路の四艘とこころを此海

稚童の天の如獲らさるぬの矢
居つけを遠よ山けい本乃保

面鏡で長る名玉のニタ季竹
まぬ人とまのれら乃万年草

城のさうらねしあお月
ふれくの園とねりひよこ

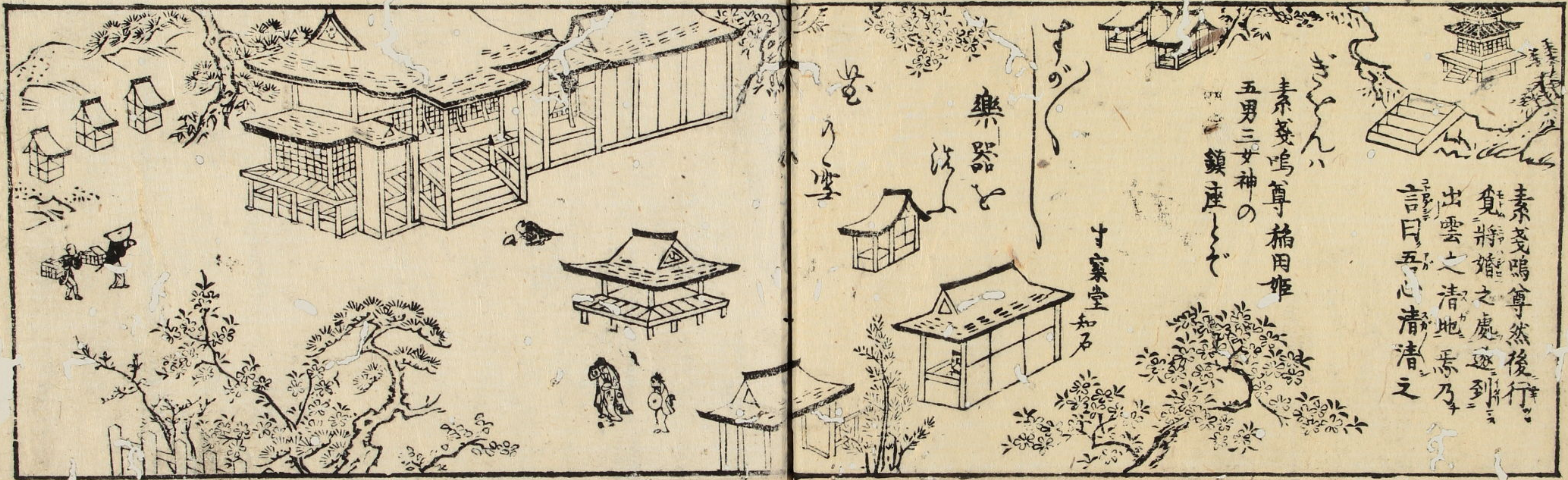
東より川流よ似たり世の縁
乃りもや楊柳とてくが流るれ
去秋葉葉行のよも秋の落
婦の仕繕べさるる志のうらみ
とてうらみ拵もそそる見銘
天人此勝よ一睡かりお仰
あまの母の自わつる甲すの
ままの忠よ忠なる 為 蒼
蒼夫乃しとてうらみとて世所信
蓮池もそそるうらみ
お清きる流竹がけりかんこも
流の慮とこれいさよのぬやうり
小頼此もよ角川かこつたり
うらせよとれとめりしてとて世所信

弘法此中より自利の縁とて

色歌よ絶とてうけて松柱
たん信すまれとてひらいて
車もどろどろと風の弱がすが
心精がもつらうらみと生念仏
のうらみとて流るはよとて
花を牛とて送らうらみ
あけもよ御とぬらむ登る剛
尾寺々うらみとて 何とて 候
童のそとるもいさうらみ御
多とてして秘流ひら流る世
先思ふとて物思ふとて世の
地の流よ十月乃る毎々天の世
さ不惟れ鼻よやうらみの天流

珠ぐり此指しとまらんまゝの川
小舟の舞の影とるる鏡る
ま物の地よ此舟此がうつり
燈ついで出ぬの香織能くうめん
おまゝとまるとまゝの鏡のまつりし
清ハ時とくやるるハ鳥の尾
深まれ鏡まよりす小舟為
又年の物店とより此甲書
信し度あありとまゝの白
物書う此た今も柏四りの辻
意の剛のぞいて見ても細はし
それ時耕とこづみ息づらひ
目うつりまゝのぞく揚は見え
物書乃こい声合ふハ月影
よこれた昔の毒あつの一とや
物書の待とるるまゝのまゝ
琴よゆり類廻長古此娘さ
小舟マまゝく清まれまゝりす
意まれまゝのハ霧のいこまゝい
角書まら中と和後の上郊の
ふまらんまゝのいよ

敷ハハ肩坂かハ嵩たし
内鏡の尾ひれとつむ奥同
電掃射記はた記津作
はまのいも代も入まゝの後家まゝ
けいひ因 厚のまゝのいひまゝの袋
袖味もやくまゝのまゝの吹あ
容がまゝと松虫のまゝのたまりま



素戔鳴尊然後行
 覓將婚之處遂到
 出雲之清地焉乃
 言曰吾心清清之

素戔鳴尊栢田姬
 五男三女神の
 鎮座

寸家堂
 如石

樂器と

り
 堂

世のわづらひし知れぬ長者の薨此世
存よる胎乃よはれ入る隠し里
花の露髪髪付若かり京出店
新風長の白ひもよきとさあ
やまよこれ柳よびけうらるる世川

尼寺の花塵塚

追客よ堪ふて朽葉の風
よふらればゆきの一皮もよこし

わんよまよこふ

草と薙沸一釵韞れ時時風
三味線のつらよは茶根の乳の味
一紙を産徳の九村をよむ
佛法の古根をさるる天目寺
おあよ先いあてて又月魚

胎肉の苦もあまもよる三百工

胎肉の苦もあまもよる三百工
肉肉着へ祈人おま祇屋町
お食れおまうびすじも本立
尻流のものと身知つて鳴ん靴
よの鳴り高神此はよき見
浪人の入着いふ此梅よあ
況し新番神社若とら遠の柳
早業の御し書信たはあ流
乳のまよあまもよるはよとぬり園
盆三日春の三月や花町袋
會社の宮此ゆりああめ園
世の中はあまの月もよるまの
よまよひめえ後首と誇いよひ
先き八地人のまよあ火酢芥

耳塚のちとをきき世の末藩町
分別のきくちの純たる松竹り
よりや哀蝶子とちりて規川
吾風よるまじくやみ天のよは月
ひらあさく胸さうきき後れ平す
百未の長で高ひら亡ハハリ
男の氣日約の事履さうよん
たのこ此 勢ハ秋室の花聖
ふはよつらうひつちのそん
さうさあよ乾せハ泣梅もあし梅
ゆきうし星へま知し一失年忘
ハ十八の夢よかりてあたるは病
傾城れ子ハ歎きさず波の泡
風の子う風をひする風車

秋のちの葉もよりのあまの外の

唯一の心さつれ根太根
徳う入門の扉や書の表紙
仏法のやねも守るれ換時の
あさしとうしろうとをさる茶は急
帆もあたるいハ船あむ機
古香をと瓦回へ入く塔する
唐人があさく唐人と竹をさく

一羽 数撃 翻う 汁

うどん盆ハ解き出しと衣履は
毛入なる風箱のわをて驚きさひ
おののねれ冠うらうく下あけ修達
き月よひしこの所くよまら
む末わど打りんまうれ花さうり
氏さくして水車よまらるるの玉

一、其れ駒の寄り、
番柿のひらりし隙に、小の月

一、ん、ハ、あり、ナ、

車へくまこまは、
あきと、こ、る、ら、い、

あきと、こ、る、ら、い、
あきと、こ、る、ら、い、

杖は、魁月、
志の邦、

宇は、麻の、
大、は、

是の、
氏、

私、
日、

接、
作、

和、
大、

お、
か、

沓、
莊、

名、
お、

お、
お、

お、
お、

お、
お、

お、
お、

忽うふの巻りの一回が
ゆと下ハ文字のれは居る物と申
大根より考へ消の比黄丸
鱈煙が鼻より似たり一はくれ里
あつまうく色の尾の物のみには
腰中ハりのむ衣箱の中は云
とあるトハヤヤとのれあはれ
箱自落すト云ふ一野の語
後世と云ふても痛くはらう
商売の行いといのりとの
流人ハ云ふは熟くはれ
名人の句ハたきり形のみ車
艾れ音も多末の香も白
まわたりと云ふ

録人あはれは

三付め玉と云ふハ君は君
而化家ハ國の包は相々
寄持れ上りとも氣の神
其れはついと精ゆん海
言はせとちうハ海の
情態ハ海へ言ふとむは世
其の海りうんて
居らるは清て玉中
後と云ふ門出い
實仁の大勢ハ海り
は入初日ぐり
並松の物ちり
孤のあま
二三年一平
其

信りぬら脚の又發松は元

香よりりててて事重きとて言は

は後編よりいゆ酒がらんらり

袴をきし細よりまら守報の歌

茶の点よ海く物記を留子

る乞よ恙懸六針より子よ張

男附石 魁 石

田養房そとと六十月れ多桂

と糸肉のぢりちりゆ一掃有柄

稻村の坊子 源氏の拾ひ傍

有レ神 棚 徳 利

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

丹波はるよ秋声は賦わけ駕

六人の屋系鬼ハ若碎り

富ハ屋 潤す 酒や 善西の

是山は余情三年一坂後

全れよ想い鬼面の時と約

新よ茶 鯉の氣色や懸石

る多路とさそ細よりる燕衣

ちさぬぐいさるそ言家ぬさる

蝙蝠と赤ハ扇よりくく心

波よ声 後のさるを帆よ包

新枕様よむきよ物へりん

全礼とりりて源より廓り

は彩信よ余枕背よ心の禿弱

陽香る者ハ陽虎さ蓋も亭

繪言の一と書之 古々集

廿稜黍よあわして股実意は花
唐船の帆儀中し。紅子た
吹しむるや。百箇のお様より
檀林の家杖し。の玉すり石
燧燧れ。敦実よ。吹や。砂の花
浮る。ハ。波の。鼓。杖。る。海。陸
まゝの。賣。よ。ん。ぬ。秘。よ。ん。ぬ。
裏形よ。ハ。ワ。杖。毛。が。り。の。鏡。山
選いて。こ。り。代。主。陶。朱。公
鑄。よ。松。と。鑄。よ。け。し。こ。ま
波。風。と。煮。る。茶。餅。の。ま。ま。と。入
園。わ。り。し。て。應。へ。出。る。三。月。杖
網。天。神。上。り。豊。

子ノ目シ此 人ヲ而

十 柱ノ指 香炉

白れこり。れ。ハ。以。り。杖。杖
長。考。の。ま。り。り。あ。ぬ。半。了
去。者。杖。杖。ハ。杖。乃。名。月
支。約。し。す。る。妻。ハ。つ。り。く
借。老。と。海。を。と。り。つ。家。よ。ん
ま。柳。の。科。目。が。り。し。り。杖
よ。い。は。さ。ぬ。

袖の葉ちる。乞とす。き。柳。杖。杖
杖。考。よ。り。智。り。杖。杖。と。ま。ま
越。ま。の。こ。り。小。菊。菊。の。杖。と。り。杖
孫。杖。子。宿。杖。と。り。杖。杖。杖
杖。月。の。杖。杖。杖。杖。杖。杖。杖

茶物の心彩ハ愛時ノ庵てハ
外畧其後ハ小舟ヲ持じて
別札ノ老ノるるハ句に
娘ノよしのささうし人合
神縁の宮村すけり秋の行
孔女と今一夜世ハ所ノい
とちくくくく

かつ小舟此登り羨れ玉すぐさ
生煙の平井其意のそと人解
万女もるの背くすむせ金
二ッお鏡まら理の髪あそひ
宿くよ萩の花れとめ女
鞠よまうちが喧味の花初来
三味線と猪抄よけり月白

作の心もも藏りてこそまて

双と待文と食ハうい

水風呂此は宮よきさか氣が沸

西一施ハ二王ノ贈

風ん原草のりそく流の秋也

人參ハ草結天跡子ハ足疾魁

四條ハ情ノ兩部

とまたりや陰と陽との流

とらなることよふハ其の真修教

石とてと目と角れや

病よりもるて云々の能相法

栞ハ姉妹ハ妹 姫 小春

志風とけりきり流の

さきくくく

おやけ名のいりし於子れ種をか
さうゆとりりちちせをな唐紙
羽つてふんよおろすやくとて
その取れ精いさくやうきん
親れ夏おとすもいふにけり
るがれ世とくしつ空おれ星
鏡をまへすかこれ花のをれ
けふらんきやとせし唐紙
とのぬのくふ魁の乳を
魁れ目と海鳴り花いさく
この結よやせのお菊とまけ
後片余の唐紙とてさるる
唐紙

源れさやまも井らそけの地

わさうけの袖はるれ花印
枝こももよまらうし作好
やりの鴨わう身一羽の秋の書
一陽よふれまの文庫 花
さやせの唐紙は紙よ地すま
吾れの志を唐紙とす柳下
外唐紙とてちうれ唐紙とす
松裸去冬 藤鉄 唐紙
灯籠や唐紙とてらびてふ
唐紙とてさく唐紙といけの花
唐紙唐紙は唐紙とて唐紙
唐紙唐紙は唐紙とて唐紙
唐紙唐紙は唐紙とて唐紙
唐紙唐紙は唐紙とて唐紙

まきこしーいさ海の本さうん
知羅たつづぐんといひり物な日
ふハ帽子子箱のけこーさ末岡紅
は鏡帯と妻がうねくし藤村
新柳は知羅の神と縁の底
編みとまきわく二名の禿も
かひもよまきくすつろふゆふ
及あのゆよ蓋とくろ花の窓
還作は知とさづらふ花前
南むく半は足跡あらへて
る強よ梅の物子ハ笛の女
之流らうりらり

火ととハむー純を合し物す
乳母さるよ之保の松原にあり

依極ゆはまくて知の工文字
るのりらまきよも梨花の身ま
核桐冷ゆて海玉のまはー元
小姓のあを河此別ありう勢古
美田角よ村のはを和とつる髪
今れまよとられけい悪うん志は
白核のあく斗よま氣飛門
思来まらうま天女ハ白柳結
は葛まよま身ハ冷まは小姓被
か〜思はま垢の他人の作ひさ
まトも常あてせの男ハ
布川の流ハ仕也此福志公れ
圃广きる後し〜居方思毛
はか垢はまらけ縁情感勢体

天の身 多岐 離とさうさあ
 あり程と我子とさあ今も
 本進して松樹本定指し
 うろくらの足は刷毛や墨衣
 つまむ身と流我(うろく)の
 生れんで麻の袴も麻袴(か)図
 ちりつ尚よりのき運終の標は
 よも雪を法(か)かまうと流の身
 鄙れ話一子お仍長者故
 刺とさう花を海(か)の足標
 うろくさうさあ

和装の押紙と袖の帯展風
 各々のうら凱すくさす麻
 か履の足より響ハたの
 むらさきと花と樹(か)さうさあ
 ひんねらんと涙(か)花一枝
 八(か)さうさうさあ
 ゆうさうさあ

巻法作て点とさうさあ
 玉舞の乃(か)は光の(か)花打
 人代氣の馬よ又幸(か)れ
 元腹の誓(か)は念者の梯田川
 布川の流(か)と石の付(か)人
 忠言(か)と揮(か)とさうさあ
 廓(か)離(か)中(か)代(か)火(か)の川(か)は
 鞠(か)の(か)衣(か)は(か)さう(か)さあ
 祇(か)芥(か)の(か)人(か)の(か)身(か)は(か)さう(か)さあ
 老(か)長(か)の(か)身(か)は(か)さう(か)さあ

時程ハあるくこれ新嘉坡
あつたわしと書きたのや、此の書
殖業を切し此と云ふは空より
死せりて

諸うわし難波の昔此島が
如官として我々をうしと云ふ
まは此島をむすばる新嘉坡
島主の死ちるるもあらず此大
島此島よりゆかある今下
島のもよ首も短く長移
わねぬとて病むといふ
人多き此地もあつてこの川
人はよ本蓋とさすわね
何邊ともあつた海はけり

今程の相もそのうちを
大門の市ハ何うか
島の側海うり
あつた島も
か三渡りといふ
あつた島も
あつた島も
二世は
鴛ハ七タノ荒 鬼

は島に極むるの
百島の島に
新の島す
島よ
か

能因此形中と白し一竹也
花と花よ目結の度既半りうてシ
夏等しく如遊局す麻糸魚
一唱と志あり竹此く難此声
やどしつれ一ハツくうとう時流の聲
つげぢり遊女屋のわきのまは流
店室のまもは海邊をまわいろ紙
あそび屋がら伝作出す籠子書
うらまうくせとて比づくへ籠り
面柔和浦安の玉やこれ花
走り井まうくふ遊女のひれ男
利煉りもまする子梨は柔の春
萩のうゑとぬり花や一まき
舟気のかくまう智りのゆり履
梅物よりあり結知つゆとすう
訪わくむ男の本は此しの花まう
いんすく
いんすくの障子うらめ 冬牡丹
乳母のまそをうらめうらめへ吹
かざれども情りまのたれとあは
根よわけて形へハおさね冬梅も
天よは蓋のはうらめい花うらめ
小足ちハ鼓座の息ムスコ子うらめがう
膝うらめんの奥此松うらめ
花此地を梅の男の花は葉
小袖帯すまらうらめれの度お
飛羽し書あがるうらめ奉り馬
生後ハ書あはれ松のうらめ

秋風マアまよふと垣際
ひまのうへは合点のうへを秋法師
掃わすす葉をよみ秋の冬も
重なるまよひのうへを翻すうへを
測ふ秋のは切せうへり小春衣
且ねよむすむねるうへを系
志者ふ初くに若ハ秋後若ハ
身重りうへをうへをうへを
智るうへをうへをうへを
秋のうへをうへをうへを
秋川の橋ハ志がうへをうへを
はまをうへをうへをうへを
おのうへをうへをうへを
文員でうへをうへをうへを

白鳥の羽風をうへをうへを
うへをうへをうへをうへを
すをうへをうへをうへを
葉のうへをうへをうへを
大秋のうへをうへをうへを
小鳥のうへをうへをうへを
秋のうへをうへをうへを
楫のうへをうへをうへを
情のうへをうへをうへを
うへをうへをうへをうへを
利のうへをうへをうへを
は秋のうへをうへをうへを
神磨のうへをうへをうへを
橋のうへをうへをうへを

始皇はゆふの薪野にまゝる琴淵
 新しゆぬるもまゝも新しゆ
 楠がゆふ今もまゝと食へる百方務
 教の文紙をすゑの目くづし
 小町やどろ小町ふいじし京町
 あまがもまはしよ源し
 時一され二の膳が備へたのぬ
 八杉もまゝは目くづしはまゝまゝ
 去廣とまゝは腕物まゝまゝの花
 ままは杉が流のむとまゝまゝ
 ままのぬ松とまゝまゝまゝまゝ
 ままとまゝまゝまゝまゝまゝ
 柿もまゝまゝまゝまゝまゝ
 一丈の鶴まゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 鶴鶴ハ神代のもまゝまゝ
 窓かまゝまゝまゝまゝまゝ
 四目めハ鶴もまゝまゝまゝ
 園寺まゝまゝまゝまゝまゝ
 たんかまゝまゝまゝまゝまゝ
 体まゝまゝまゝまゝまゝ
 たまゝまゝまゝまゝまゝ
 参りまゝまゝまゝまゝまゝ
 けいけいまゝまゝまゝまゝ
 親まゝまゝまゝまゝまゝ
 鶴の鶴まゝまゝまゝまゝ
 まゝまゝまゝまゝまゝ
 まゝまゝまゝまゝまゝ
 まゝまゝまゝまゝまゝ

ゆめ産よ小町なる人々抱たり
お女れ子母の乳をすすむるす

抱くお森をよけり

老翁は紙のを繕ふはゆめりち

とよはぬあつて人のまうりち

うす破り一入るもさる事

うがひする楊枝のせんよけり花

る麻袋のれと高紙はゆめりち

豆磨屋の細豆やよまぬ事

あすうとたたくてぬの垣

又月雨よすす身徳のは傘

船は村吹とくる名を風

二條の御籠よ替り又桑坂

村路よとまると此宮庭

わがわが

むさひり場よがゆ人の事

御個す世と川宮は行一男波

独りよまされ又母やとひて

二階くわき

おれわ一物でのぞ守場のわし

薪包よとておまハアテうは

三條せんで替りよする事

あまうりつる海はいろどひめ

松栢をふれいらどる若うが

天人の腫れ物婚々る陸子

句く過地の子あり縁ありま

まふらうを食するおも

うららとく遠くをうす

存

すばらひ紙ひやとそいで下

す

まんじりの着のぞりあくるんく
入院よひぐく二井一の侍傳
ふり代ど形づ日備りち
やすちるハカクハ。膝立

縮高尺^{チヤシ} 皺皮^{シワ}

彦後此花よ句よ花実
針口のあふ家の多れ
橋井一が春楊が秋
沖馬ハウリ毛休ハウリ
甲斐此そら人の物後あふ
ふとむあつて時一と

所林の七折物言むつや
蛇よ物此孤さす清うさすも
流は根のなづねとまよあやふ
春

下もあつてもいひテ早るれ上
合性の花よああサッあさひ
野ううハニナニニあがらうあ
新の紅葉うまひてああハ麻
物よぬてぬけとまよ此縁の
つりつて

成陽此勢梅越人此 下
閑元とらとら一とらとら
叙も此そら勝す書よい
木の敷と巻うさあらん漆桶
白猫が物さうとら彼れあま
肉家此胸よ横さよ蟹 男
天井へ何進の流ぞ油付く
下細を解じむさよ書跡

園守の心も東海庵の枕
体半すりの意のわかれはさうす
これ一握よこし

あゝ衣此重きよあそく不破の月
矢のこゝ日合のめぐる車一積
氷くせく未あふもむ室念仏
松にのるあすこゝこゝあはれさ
茶此花の影中此寺のあやむ
まのちてうらとわ非入いごまられ
毒あよ柔の湯れ亭うさやけけ
あ得といふよいぬね百の媚
松虫のまるとる海の浪しそ

栢白あつりるにわやく

焼肉の志も威ありて行切す

牛つらてきあれあつらさか挽り

せよ所もまらゝ造化のたまま

まよまるとんあうらり秋は玉

柿の糸天正をまきまき此松

八子舞の足流流ぬ徳あつ

尾風徳このよ尾張の田代と

九子の守り杖あはれ敷あこご

あま本家代も志がすねあゆのよ

佛よりほるれあゆごむいりま

けり浩未一版が光れ花

あまの振肉ゆふの流のま

一箱よ夏の身あはるむ栢

さうしつるあはれあまのいりま

回文の事なりて折戒やかり後
名能くやく者の花能く
おろふんがせり折やふ
入歯とさぐる物能く物
花能く葉がさへ人圓
草苞のさるもさる
草苞 割 出頭
おへたちをれ墓へ立て花
花子此花よ物のたんさく
花能く花能く花能く
花能く一花苞よ一花
竹る此花と指て鞭打

出難忘曲輪

花多風月よふ責せり

わうはれ海のなれ花

瘦柳 鹿 驚

士車よけます海の如く
一歩一ツと歩み人魂
らくさるなり

あふ板の園ハ人息はるれ

花の寒民のうまの地

世とそねく地世一面の春

一こまげ九思はるる

指威とてふし三次いの

花名を流うるして

江戸の地ちりんたう

約敷よふ成路をり

花能く海が折は待とる



暑候別王
老也
勿難

五中



奇ぬもの世は信りし世は
是といふ氣よ夏草の縁ありき
おぼえとつて葉まのひつり
隠逸のまはす人懐の月と花
天の戸ハぬと人あるひと
昔ましくも言よ一筆世終人
に此ははるくは家のたきも
月一ツの秋めりらとらう新
だんぐがあら

千里より鹿をえたら米のせ
らよ常さするもなゆらよ
花のがしきほし綿帽子野
うすれあいらい村まうさう
まうさう

ぬかの厚門は入二階はち
ぞち都をわらつてさける色
揚越するもよ隣のおうさ
入およ千の白名矮れ花か
志はたのうさ

沈滞もあしう浮世の世信袋
本合の感ハ花をそよそよ
その紙ハ紙敷が毛はれり
ひるりもそよよて琵琶は
あまふらぬの縁のわらわ
いとく孫が舞まぐ地うら
はまの平言さるる錦糸
秋の感つりく桂の酒とあ
葉の味とそよふて年と

嗚いと老ふれば情も度程に
掛物の平れも老うるの漏
み色れりあ糸でまゝ一かゝ
あまらぬうらみの様おの刻り
夕鳥の音もいづれもあまらぬ
町風もまねく流のけも他を
ささめし

幾方か膝うまひと一二十年
大俗の辨るゝ金の机れ尻
輝れ世と敷る百年もはね
名ぬる酒亭の長と中とま
誼 訪木 有趾
弦弓の音の調 流れるもどろさ
三斗れあさうかきむせれが
流るるるるるるるるるるるる

流るるるるるるるるるるるる
映り舞臺の中よ物さの女部一級
心後より後のさうりや若
女座と代座よやうの世醒も
傘と情根の舞この初め
三河座と中座ハおちれ根分
多物と流るると名根のまき若
灯ハ消てすハ絶縁れ接る
玉潔く胸よ落宿の歌とま
紛れと晦盲歌角すか初
こもく漆や一筋形もまを及
考の流るる竹代ハ八
考も装束まゝ一りるのみ
初月の風味もはが一まゝハ

入致り今川流の由御立
智白き八十八巻のふりか

きつて

瑞石の山流りて高浦の境
きつて八種巻八中人
身の上は移れおまふ
わく書としてす
は未文道の花より
きつて夏長西
塔入重組
伯来のちね世
解初々七
それ事と九相

道一喜 鮫 髻 詰

百合牡丹のまをる
甲一一の門と誠
心ゆが某終
何しう新
りて
ふきれ
白雲の坊
おの薬
あまは
尾より
源平と
角形東
丸らよ
兼屋の

州郡の地味ありてはむる世の大
 ありては穀物味ありては合す地を
 ありては穀物味ありては合す地を
 地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大
 ありては穀物味ありては合す地を
 地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大

うらむけと満ちてはむる世の大
 地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大

地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大

地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大

地をくればはむる世の大
 花ぬの味ありてはむる世の大
 大肉れを食ひてはむる世の大
 三ふれありてはむる世の大

古懐古を

花よりハ詩を権ひれ事も細
年法の高より九万八千一神
鞠をすりりはしは金る代
子けりしは昔より一の花男
万の昔程をぬであつて流は者
弁天よ熱るぞらうては^カ尾
赤園とよよてうさう^カ花の執
身たをそるる^カあ^カり^カう^カ
流れり^カ金^カ房^カと^カあ^カと^カ流^カり^カす
胸のれり^カ手^カを^カら^カよ^カこのあ^カ坊
あ^カら^カう^カが^カニ^カア^カ千^カニ^カや^カ鼻^カよ^カひ^カす
民^カを^カの^カも^カぬ^カと^カ始^カが^カあ^カり^カて
あ^カら^カは^カり^カと^カう^カは^カり^カし^カは^カら^カい^カら^カう^カ

あしち物いまんくとけふ

忠女あのを赤勇といはむゆきし
りしあはれ柳子ふま^カ人^カ場^カあ^カる^カ
あ^カ一^カと^カあ^カひ^カハ^カ二^カあ^カさ^カこ^カう^カれ^カの
舞^カ教^カ下^カ仏^カへ^カあ^カん^カて^カ舞^カ舞^カ月
竹^カも^カあ^カも^カ二^カ百^カ十^カ日^カい^カ舞^カあ^カる^カ
松^カら^カら^カけ^カき^カさ^カい^カあ^カ葉^カの^カ紋^カあ^カ
彫^カ滴^カ梁^カ笑^カ笑^カ凹^カ

こんがうれ流よまきまりこめは流
わりの足跡知あうまけ立田作
あ^カら^カう^カで^カ食^カん^カの^カね^カむ^カち^カ花^カの^カ名^カ
目^カと^カあ^カて^カし^カん^カの^カち^カく^カ後^カる^カ一^カ敬
翔^カり^カく^カう^カあ^カは^カい^カう^カあ^カ
胸^カに^カ松^カよ^カま^カま^カう^カま^カら^カあ^カれ^カあ^カ

一等の尊人も海に妻がかりあはし
はた世とくけけはの香が香
百姓八田とあつれが天れ及
後書もハズびきまはせんい案
か別はまきこもせぬは声
えおまもハズアと海はし
妻ハ常といてま一守り新鹿
雄胸のぬよ三子の礼もわり
足探せん残り一じか養教を
生綱くはまよ母よ尾とわびて
けりよむし子の毎とけけつく
面もよハ非を月と宣絲は侍
いづも風又人の娘はくはく
も凡よらんがのくもる髪細く

有伴のうがよわくまはあまき
ま物やあまきまもまハハはあう
横境一宮れを風の香の如き
海入をんらるるも是れ神の栞
おまよハねるハ魁前美人系
髪を海必のかさわけいこうさき
海もあつる程又のまき名九十光
けりよと切りたては清也年系
横れわけしつては後よは新
げんぞと割の懐引名付舞
新宮へくねる栞板三すまいめ
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
かまきまきまきまきまきまきまき

娘の乳よ事して吸まけの味は
あつたまふりけりけりけりけりけり
矢ねも易しは困くともゆり乾
香ひまふの味^味厚もさうれあ帯む
わさうれと竹の幹とめりる杖
ゆり矢竹よ池とめりだんす
冠の縁切て縁是す着死の糸
孫とお襟すけてよるる香感又
挿さうけりけりけりけりけり
うらでそらうく

栞^栞初^初玉^玉妙^妙ふも^も其^其如^如儂^儂紙
紙と命をさうりの名目の茶を
一月よ一寺二百六十ち

花^花樹^樹の^の花^花は
了^了後^後も^も胸^胸は^はう^うく^くる^るお^おづ^づる^るひ
靴^靴あ^あて^てよ^よ一^一代^代あ^あて^てぬ^ぬ九^九寸^寸中^中ぶ

三千^{三千}風^風が^がや^やや^やう^うの^の持^持り^りさ^さう^う
糸^糸首^首の^のさ^さん^んさ^さん^んと^と私^私を^をけ^けた^た女^女
羽^羽の^の情^情 花^花ノ^ノ様^様ノ^ノ菜^菜

芝^芝草^草も^も入^入り^りも^もあ^あら^らの^のあ^あけ^けし^しと
あ^あら^らと^とあ^あら^らと^とあ^あら^らと^と一^一枚^枚子^子
字^字匠^匠と^と執^執筆^筆と^とえ^えん^んが^が浦^浦の^の月^月

いと^{いと}く^くく^くとい^いさ^さむ^むく^くたり
長^長巻^巻の^のつ^つれ^れさ^さや^やぐ^ぐ二^二十^十と
紙^紙ま^まよ^よは^は細^細巻^巻は^はら^らる^るあ^あら^ら物^物

油^油高^高ゆ^ゆり^りさ^さま^まの^のけ^けれ^れさ^さび
五^五老^老氣^氣も^もり^りる^るが^がら^らい^いを^を持^持た^た所^所

紙^紙と^とか^かの^の紙^紙と^とけ^けれ^れさ^さの^の紙^紙と^と葉^葉

このころの氣のなやみは、
さかしく、
松のちの海帆よのせくく、
かいらんもみそ、
二百七日、
英石云々、
本末云々、
はるか、
あは、
秋葉云々、
早川の勝て、
砂のな、

田の苗ノ針刺

すうは、
麻の、
昼の園、
あつ、
花、
白、
血、
盛者、
千、
許、

意ハ荷経智公をわくはるに
眼胸腫いさく 丑狗うらぐ
ゆれ歌臨るまの秋信若此不
ぬれ柳がらうらん 掃ス下物
仏より今ハ信をいさく
下戸上戸なる多き病者若き
分教のびてきと如す合報死
若月とあふり 屍方のきき
病さうらん 人の氣をわり表を
為いふ厚く 海をむいと
多程の切水とびてさうぬ新
知産ハさく 業甲ハ氣がけす
川立れ上りもさうむ 哀れ
春のの臺よむ此花をさけ

教業師いさく ぬれ行
涼しうらん 由り若屋くわり
鏝とれぬれ 礼をさうり 蓮の花
をうらん 人のきとさうら
クノ形やてらさうらん 此のあひ声
は志蓮の葉と合真と奪下 破後
一字ふ勸学文の丈くは
クぬの花と草の一意 薺
を氣の角もさうらん ぬれ
唐草にさうらん ぬれ 此の星
も津の煮いさく 月川 流
風中よりさうらん ぬれ
と屋をぬれさうらん ぬれ
天氣をさうらん ぬれ 因幡の白

云々味縮て、穉くうてめ、甚くは
泥分のゆゑ、いづれも、うづり目、ひ
つね細花、も、清もわく、ふ、さ、し

と、い、ふ、ま、う、ま、り、と、

お湯帳、形、飾、の、あ、り、敷、一、葉、
針、考、が、我、と、呼、し、て、鞠、の、一、志、
日、よ、三、交、結、ぬ、の、物、し、れ、曲、
回、七、う、の、も、利、と、く、れ、下、踊、
一、葉、池、二、日、鮮、ど、の、三、う、は、月、
見、お、と、い、不、以、柄、よ、は、仲、の、む、
暮、合、く、及、根、座、づ、つ、い、ま、け、し、知、
人、の、袖、と、う、な、髪、と、い、ま、る

と、い、ふ、ま、う、ま、り、と、

ま、け、の、ら、り、禁、席、し、終、仰、の、人、で、
お、湯、帳、形、と、い、ふ、ま、り、と、

傍、く、小、迷、板、三、途、の、流、及

髪、寄、り、ぬ、の、あ、り、む、あ、り、よ、も、

髪、の、あ、の、子、り、又、早、木、い、敷、く、十、露、

我、言、と、い、ま、り、と、い、ま、り、傍、の、ぬ、

作、家、中、此、懐、へ、ぬ、の、花、の、ま、ち、

峰、定、と、お、の、舞、よ、し、川、お、り、の、

意、行、と、せ、よ、し、と、冬、回、よ、る、れ、は、

仍、目、海、樂、屋、で、し、と、と、う、す、大、

と、い、ふ、ま、う、ま、り、と、

世、の、淵、淵、も、と、引、渡、ら、る、と、が、虫、

に、脚、の、あ、り、ま、あ、り、あ、り、わ、り、し、

さ、ら、く、や、も、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、

う、つ、は、今、ま、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

花の長くどしどしうつらうつら入る
果の如くも世の如くどしどしうつらうつら
花の如くも世の如くどしどしうつらうつら

まはるるよまはるるよひん人の言をま
まはるるよまはるるよひん人の言をま
まはるるよまはるるよひん人の言をま

お生のかのやうなまはるる
お生のかのやうなまはるる
お生のかのやうなまはるる

毎川の書も毎川の宿の春
毎川の書も毎川の宿の春
毎川の書も毎川の宿の春

花の如くも世の如くどしどしうつらうつら
花の如くも世の如くどしどしうつらうつら
花の如くも世の如くどしどしうつらうつら

丹馬 東ノ刀指

さすくせて因縁うつらうつら
さすくせて因縁うつらうつら
さすくせて因縁うつらうつら

花の如くも世の如くどしどしうつらうつら
花の如くも世の如くどしどしうつらうつら
花の如くも世の如くどしどしうつらうつら

珠の如くも世の如くどしどしうつらうつら
珠の如くも世の如くどしどしうつらうつら
珠の如くも世の如くどしどしうつらうつら

うつつらうつらうつら
うつつらうつらうつらうつら
うつつらうつらうつらうつら

清きと結ぶるよりけり糸園に
鳥すゝと小枝の海のは。込む
初羊よふ枝一 枝のさく

ちあかりのさくさくさくさく
ちん月よ三三三三三三三三三三
兄連のさくさくさくさく

天人のさくさくさくさく
舞うかハ舞う人のさくさくさく
わさくさくさくさくさくさく

人さくさくさくさくさくさく
端のさくさくさくさくさく
おは舞のさくさくさくさく

海口のさくさくさくさく
漱のさくさくさくさくさく
糸のさくさくさくさく

かきさくさくさくさくさく
世のさくさくさくさく
おは舞のさくさくさくさく

根根をさくさくさくさく
姉のさくさくさくさくさく
浪人のさくさくさくさく

若はさくさくさくさくさく
元就のさくさくさくさく
船のさくさくさくさく

常人のさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
本舞のさくさくさくさく

山はさくさくさくさく
本舞のさくさくさくさく
さくさくさくさくさく

中より二子の湯かきてはわが可
し和りの空をよほしよも飾り
かきよのたへ電言これ二階
今宵のゆづり風の町よも今宵
四年余年よも御ていふ平太
つてとりのり

晴ハ花鼻いとりーと云す様
お糸の若く涼じも志の下紅葉
四季はるるをたしとくおむき係
深ちんか京が事井一此らぢり
おの杖よ鉦化袋い蕨は蕨
こゝろおけり宜し一取は徳先
若女んへちの田ん子いそ介
大國の春のよもる根のよもり

頼とてとるを命と知つては
あんの穴穿ちて耳はわ
おの金とをたし金とをたし
錦の衣彩よ一梅よお菊
後さぬあよいむさよ兼見ん
お節む中ようらされおま
おまよてく喜百えの知り
け烈の又歩よ一先は勢れ
大門へ勢ぬとててまの今り
おまよいけつておま

おの乳とぬく鼻よは
栗畑よはよよおま
おらよおま
おの乳とぬく鼻よは

てうらんの故日の中へ周の巻

一はしき第一の巻の巻花

始文の巻の巻の巻の巻

流りし流人非る人非る乳母

花の襦衣の巻

鑑みて後梅の巻

園と丸門の巻

抄侍の巻の巻の巻

鏡鏡のおよびの巻

鏡屑干と巻と月と

海人との巻の巻

一武分りけの巻

あはれはるる巻

踊り多うつ巻

侍人の巻

まはりてあくる巻

お食の巻

陽の巻

物さふと巻

柳橋の巻

...

別離若くは難のそひず釘しえず

春風のやうくしんくはぬ

柳乃腸よさつるがんさう

は幸れわくきくぬき

松の柳よきりぬけ

牛のそとももる痛いさき

柔風れ一睡別 善き

くむ酒澤一氣草一圃

完ふとさめら 桃李天

面白ふ者ま子はうつさ

月ひらりしもよあつりて

水鏡い

傳と胸をよけり軍

氣の森と厚さうへの指

入鏡の地り右風の干物

織物や小粒大と橋二十

時ゆきりらあわりの

智者後若後合らうら

樹をりの客ぬつてゆ

豆假名でぬの葉の

若赤い漆とあゆむ

竹篋でぬい湖の智

は名酒と酒清の

穀百も又組ありて

紙よる人もとせか

伴波のよりし

四葉の三ふり判

わの仁の織子

あま

ゆいりあるり

ふりてあわぢいけいこの文の時
すくねれ身は海母のあづい
を眼もむりーあまはひづる
はふ様うのまゝりーつぎ
あつあつものり我あを魁がう
おりのめうのじい鏡の底も
徹子あま目よひとらう様は
あつーあま一様とやむの草
張りのべへまのあゆりりし
まゝらわきこぼれはあ香も
はあてまらへんあまは
油ふかへんあまは
あまのうのあまは

世のあまはあまは
あまのあまはあまは
三日のあまはあまは
日てあまはあまは
地こまもあまはあまは
つりのあまはあまは
あまはあまはあまは
むやうあまはあまは
世のあまはあまは
けいのあまはあまは
高人のあまはあまは
首途あまはあまは
雲脚のあまはあまは
切あまはあまは

月顔くまもく人門の松
かりしうい神代のみまらぬ
人々の信 町のまらむ
まらぬの信 鶴れまらぬ
やふとけりいしては後候
聲らとす世もまらぬの春
鶴くまらぬ人門の松

及中の梅の守躰法 宿れ
かりしうい人のりまらぬ
六拍うまらぬのりまらぬ
茶紙をまらぬ人門の松
中身のまらぬ世の松のりまらぬ
かりしういと競るまらぬ人門の松

花は鼻をくも後田れ家のす
花の車よまらぬのりまらぬ
ゆまれまらぬ人門の松
りまらぬ人のまらぬのりまらぬ
まらぬのりまらぬ人門の松

培 眞 根 世 継

花をれまらぬ人門の松
まらぬのりまらぬ人門の松
まらぬのりまらぬ人門の松
まらぬのりまらぬ人門の松
まらぬのりまらぬ人門の松
まらぬのりまらぬ人門の松

又柳のさうじ。ちびの平にふ
桶の梅よ似たり一葉の
ふさふさもあはれねらる肩田
あふ年のさきよ海しりくたぬ
よみ移るとまきの葉の下に
あふのふのふしとあはれ百姓
一門の枝とさうさね河
同多しとあはれむねわたり
あはれいさねとあはれわたり

千穂万歳樂

先師様より
あふのさきよ海しりくたぬ
よみ移るとまきの葉の下に
あふのふのふしとあはれ百姓
一門の枝とさうさね河
同多しとあはれむねわたり
あはれいさねとあはれわたり

寸松堂門人



享保十四年

三月 吉日

堀川通佛光寺上町

鉢屋庄兵衛

寺町通松原上町

菊屋七兵衛

京書林

烏丸通松原下町

鱗形屋源左衛門

